

STEMセル研究所

細胞バンク事業強化

西日本に拠点新設検討



STEMセル研究所の臍帯血から必要な細胞を分離する工程

STEMセル研究所は国内外で臍帯血を中心とした細胞のバンク事業を強化する。横浜市緑区の拠点を増強したの続き、3〜4年後までに西日本を視野に拠点新設を検討。東南アジアでは3〜5年後の事業化を目指す。さらにバンク事業の実績を生かした研究開発、周辺ビジネスにも手を広げ、需要増をにらみ事業の拡大を目指す。

STEMセル研究所は、横浜の拠点で臍帯血のほかに、臍帯など6万検体を保管する民間の臍帯血バンク最大、周産期組織由来の幹細胞を分離する処理を手。臍帯血から必要な細胞を保管している。3月に横浜の拠点を増強し、全社の処理・保管能力は約2.5倍の年2万4000検体となった。処理量が能力近くまで達すると予想する3〜4年後までに、西日本地域で拠点の新設を考える。

臍帯血は生まれた子どもが将来、低酸素性虚血性脳症などを発症した場合の治療に使える可能性があり、保管需要が伸びている。ただ、国内の出生数が年約84万人に対し、臍帯を保管する人はその10%程度。10%程度の米国などに比べ、需要拡大の余地が多い。同社は5〜6年後に10%ま

で増えると予測する。一方、海外では人口が多いものの、臍帯血などの保管事業が遅れている東南アジアで同業者との協業かM&A（合併・買収）を選択肢に事業化を目指す。周産期組織由来の幹細胞は増殖性、免疫寛容性が高いことから細胞治療、再生医療製品の開発に活用が期待され、東京大学などと共同研究を進めている。妊娠、不妊治療などに関連する事業に取り組むベンチャーへの投資も進める。相乗効果のほか、自ら関連した事業を手がけることも視野に入れる。同社は6月に東証マザーズ上場。時価総額で5年後に現在比約4倍の1000億円を目指す。